

## 「またね」の一言で

厚沢部町立厚沢部中学校 三年 鈴木 カイリ

「またね。」という言葉。それは、誰もが一度は言ったこともあるようなきわめて普通の言葉。私は、普段友達とのわかれざわにその言葉を意識して使っている。

その言葉を意識するようになったのは、小学校二年生あたりの頃からだ。私には仲の良い友達がいいた。その子は明るく、優しく、誰にでも平等で、クラスの人気者だった。毎日楽しく学校生活を満喫し、これからも一緒にたくさん遊んだりするのだと、大人になっても、おはあちゃんになっても、ずっとずっと仲良しなんだと幼いながらに思っていた。そんなある日、いつものように学校へ行くと、その子のすがたが見えなかった。夏休み前だったこともあり、あまり深く考えずに夏休みまでの数日を別の友達と楽しく過ごした。

夏休み中でも、連絡手段がなく、その友達と会うことも叶わず、はやく学校に行つて、お話ししたりお紙やなわとびで遊びたいなと思っていた。そして始業式の日。ウキウキワクワクしながら教室へ向かった。にぎわっている教室。「夏休みどこ行つた?」や「宿題忘れてきたかも!」などとたくさん声が聞こえる中、私はその子のすがたをさがした。けれど、いくら見わたしてもそのすがたは見えず、遅刻かな?と思っていた。だが、その日も

次の日もそのまた次の日もその子はこなかった。その子が学校へ来なくなって二ヶ月もの月日が経つたとき、当時の担任の先生が帰りの会で、その子が白血病になり、今まで学校へ来ていなかったのは、入院していたからだと教えてくれた。なんでも、夏休み前に発症し、その頃からずっと入院していたそうだ。今は容態は安定していて、本人も学校へ来たいと思っているそうだ。私はまたあの子に会える!とワクワクしていた。しかし、先生の話はまだまだ終わっていないかった。

一気に騒がしくなった教室を先生は、「ここからすぐくぐりたい話になるからよく聞いてね。」と言い、静かになった教室を見渡しながら、ゆつくりと言ひ聞かせるように話しはじめた。明日から学校へ来ることに、けれど前みたく体を動かして遊ぶことができないこと、薬の副作用などで髪の毛がなくなってしまうこと、今の自分を見られるのは怖かったが、勇気を出して明日来てくれることなど、その子についてたくさん教えてくれた。その日はそのままさようならをして各々が家が近くの子と帰ったりした。そして次の日、学校へ行くと車いすに座るその子を見て、私は思わずその子のもとへ駆け出していた。

「久しぶり!」と私が言うと、その子は笑顔で「久しぶり」とかえしてくれた。5分休憩のときや中休みにはみんなまでその子を開むようにして話していた。おり紙やあやとりなどで毎日遊んで、たくさん話して、一緒に授業をうけて、帰りの会終了後には「ばいばい!」と言って帰るといふなげない日を何ヶ月か過ごし、それがあたりまえのようになってきたとき、その子は、バタッと学校へ来なくなった。また入院することになったらしく、みんなでもせ書きを書いたり、千羽鶴をおったりと、はやく元気になってほしいと思いつつ話を聞いていた。しかし、最終的にその子は亡くなってしまった。あまり現実を受け入れられず、私はその子との最後の会話を思い出していた。その日はなにげなく「またね」と言つてわかれたのだ。またねには、また会おうねという意味がある。けれど、その子とは二度と会うことはできなくなつてしまった。そう自覚した瞬間、号泣した。そこではじめて、死というものを

改めて感じた。なにがあるかわからない、それを体験したからこそ、「またね」というなに気ないそこからにありふれている言葉で約束しているのだ。  
「また会おうね。」と。